

ら修験行者と天狗の因縁が結ばれるが、佛教では天狗と  
は神通力をもち、天界を飛翔して佛法の妨害をする怪物  
のことであり、中国では慧星または流星を天狗といつて  
いる。わか国は天狗は人間に似て鼻が高く、羽があつて  
頭上に五角形のいあゆる天狗の兜巾をいだいてゐる。  
大天狗といわれる首領株の天狗は鞍馬山の僧正坊、愛宕  
山の太郎坊、比叡山の次郎坊、飯綱山の三郎、大山の伯  
耆坊、赤山の豊前坊、白峯の相模坊、大峯の前鬼で、こ  
れらはいずれも金毘羅の使者といふことになつてゐる。  
とまれ往昔は、尺間は天狗の住まふ山であり、各地に祀  
られる愛宕社はそれぞれ天狗の住家であつて、分祖して  
住民の生活を守る塔でもあつた。惟治と春好が修したと  
いふ飯綱、愛宕の法は結果的には何の効能もたらさな  
かつたが、畿國の謀略としては興味のある史実であらう。  
古市地区或地の愛宕社、それは浸滅した遺址の一つにす  
ぎないが、私はそこに祖先たちが經營した地域の歴史を  
描いて見るのである。

研究

梅牟礼時代に於ける

佐伯氏の居館について

会員 小野 英 治

梅牟礼時代の佐伯氏の居館、つまり十代惟治、十四代  
惟定当時の居館の位置は、今日迄不明となつてゐる。そ  
れほどのような理由によるのであらうか。やはり、佐伯  
氏から毛利氏と江戸時代領主の変わったことが、佐伯氏時  
代の事蹟を不明のものとしてゐる最大の原因であらう。

(おわり)

とかく新領主は旧領主への領民の追慕的なもの及び、一切  
これと認めず、これの破壊に努めるものゝである。この事  
は佐伯氏時代の古文書類が皆無に等しい事からよくこ  
れを物語つてゐると思ふ。

だから、今日佐伯氏の居館址と推定するとすれば、地  
名、位置、伝承、参考文献等によるなければならぬ。  
第一に地名であるが、梅牟礼城周辺に居館を物語る地  
名が不思議とない。屋形、夕テ(館)等があげればよいの  
であるが、これがない。

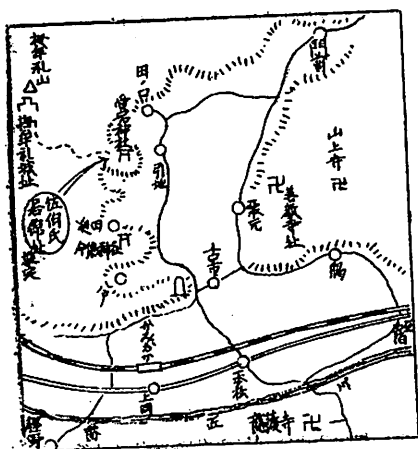
次に位置から居館を推定するとすれば、それは、先づ  
梅牟礼城に近接してあり、一応の要害であり、当時に於  
ける交通の便、生活の便がよい点等の条件を兼備してい  
る地ということになります。

次に伝承ですが、居館の場所を示す伝説が残念なこと  
にないようです。龍護寺に別館があつたとか、古市に城  
下町があつたとかの程度です。

最後は参考文献となりませんが、前に記したように  
直接の古文書がありませんから、江戸時代に書かれた軍  
記物、地誌類という事になります。これも居館について  
触れておりません。

あくまで参考的なもので  
すが、以上を各方面  
から考察、居館址を推  
定してゐる事にいたし  
ます。

大分県立舞鶴高校地  
名研究グループ協同報  
算による『地名叢書』  
によれば、古市を市場  
集落と見て、館址は旧



上野村に求むべきではないかと記述しています。しかし上野方面の地名には中世武士の居所を思わせる山下とから地名はありますが、領主の居館を示す地名が見当らぬ。今のところ上野方面にこれを求めるのは困難なようです。

次に参考文献の方から考察して及左いと思えます。

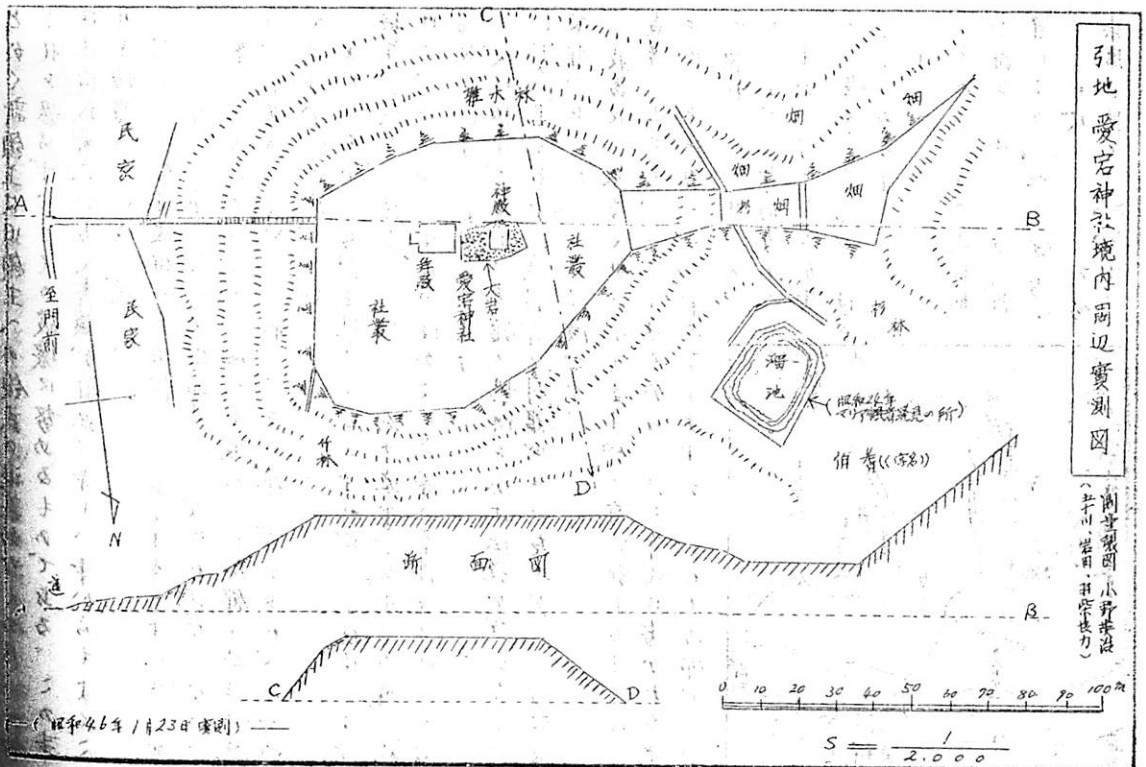
江戸時代、肥後熊本藩の調査になると伝えられる『豊後國古城蹟並海陸路程』(某立大分圖書館蔵写本)によれば、榊牟礼城址について、

古市村之内、田市村ニ古城址の山有坂ノ内三所式拾間、水戸口即ノ方ニ有、小柴山上之場の廣さ北南三拾間、西東式拾間有、南北尾統也、山之上水なし谷ニ水有、地下陸統三拾間。云々。

又故佐藤藏太郎翁調査による『大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書』によれば、榊牟礼城址の項に、所在地は鶴岡村大字稻垣字榊牟礼と記し、岡藩編の『豊後國志』にも同様に『在佐伯莊古市村云々』と記述しています。

また、山城とその居館は一体となつていますから、三者共通の古市村は一応無視出来ないと考えられます。そして『古城蹟』に記す卯のかつまり東方に水戸口があるという事です。これは古市方面を指し、この方を大手と見るという事はこの方面の山麓に居館を求めるとの自然なあり、軍学者の云う五行説からも、この方向を正面とするのが当たっているのです。迷信的な事ですが、祈禱による築城は当時の流行、風潮でもありました。

昭和四十六年一月二十二日土曜日の午後、佐伯史談会でこの居館址と推測される台地を訪れ、コンパス測量で



平面図を複製して見て、註前掲一但し更に二分の一縮小、繪者  
 氏は、この地が梅峯社城と山城と一佐伯氏の居館とし  
 て最も有力な地形である事を強く感ぜられた。

この地は、佐伯市大字瀬田引地にあって、都藤道路  
 上より約三十米程の小高い丘陵です。今神社(愛宕社)が  
 あり、また、神社の境内としては必要以上に廣く、四千  
 五百六十六・八平方米、約千三百八十四坪、人工的に山  
 を削り、その間に中央部に基岩が露出してあります。この  
 大岩の上に愛宕神社の神殿が建っています。その礎石  
 の一つに大きな(約九十種四方)の空塔の笠部が使用さ  
 れているのが興味を引きます。

なお、背後は梅峯社山と峯続きで接しており、平時は  
 この居館にあり、いざ合戦ともなれば、至近距離にある  
 梅峯社山城へはせ登るといふ、実に理想的な城主の居館  
 址といえまじよう。

台地に立てば、東北、鬼門に当り山上寺の山が望め、  
 北方門前(都藤)に通ずる道路、南方に十三重塔、三方  
 急峻な上居、梅峯社山に接する面も又比較的ゆるい傾斜  
 の土居となっています。又西北方一段低い台地の地名は  
 『御着』とあり、地元では伯耆守の屋敷址と伝えられてい  
 るのも面白いと思えます。

それは又、軍学者の云う、山城と居館との關係、さら  
 に佐伯氏初期の居館址と伝えられる堅田の高城を背後に  
 した上、台の地形と極めて似ているのです。

又、当時舟運を中心として古市、市場集落からも推定  
 して、築島の地であり、この方面からも有力視される  
 思えます。

ただ地名、伝説、その他で居館とするは一応の疑問が  
 ないではありませんが、發掘でもすれば何か有力な手掛  
 りがつかめるのではないかとと思えるのです。満足です。

が、昭和二十四年頃マリテ観音(具藏河村氏蔵)が発見さ  
 れたのは、この台地の北西下にある湖池からであつたそ  
 だす。

梅峯社実録に出てまいります。惟治と善好法師との物  
 舞の舞台となり、推定が対馬津城の軍藏をかきお大地と  
 して、恐らくこの場所や旧者かたがたせしよすが、いすれ  
 ここは中世版主佐伯氏の居館址として貴重な史料です。

(参考)

居館と山城との連続せるもの

考古学講座(大類伸、島羽正雄共著)

武家時代の城址」所載

